

岡山のとしょかん

岡山県図書館協会報
(第121号)

倉敷南高等学校 「マチ・プロ」と図書館

「マチ・プロ」ってなあに？

進学校での地域協働型体験教育として、平成25年「マチ・プロ（倉敷町衆プロジェクト）」が始まりました。「町衆」とは、江戸時代天領だった倉敷で町の自治と文化を担った有力町人のことであり、その精神は倉敷経済人の「自助・共助」の考え方や、大原美術館の民活の精神などに色濃く残っています。その町衆精神を持つ達人を、本校では親しみを込めて町衆と呼んでいます。地域でのフィールドワーク、お茶を飲みながら町衆を囲むラーニングカフェ等で課題発見、分析考察し、解決策をポスターで発表。町衆や保護者もセッションに参加します。

3年生はクラス対抗ディベート選手権大会を行います。「憲法9条改憲の是非」が今年の決勝戦論題でしたが、準決勝・予選でも「死刑制度廃止」「基地問題」「原発再稼働」等、大人でも難しい社会問題に果敢に挑戦し、ヒートアップしながら論戦を繰り広げる姿は圧巻です。

「学びの志」育成

OECDのPISA調査によると、日本の生徒は学力は高いが、科目に対する自信や興味、将来との関係把握になると、他の先進諸国に比べ極端に低くなっています。なぜ学ぶのかという納得がないからだと考えられます。地域での主体的な活動での「本物との出会い」は、自らの力不足を痛感させます。そこで「役立つために何が必要か」を考え、「今をどう過ごすか」学びの姿勢が変わります。「学びの志」育成です。

長年キャリア教育に携わり、現実の社会に触れて「化ける（潜在能力を発現させる）」生徒

を多く見てきました。南高生にも本物との出会いから「学びの志」を育てたい、化けさせたいと思いました。ちょうど平成25年は次期学習指導要領検討や大学入試改革など、知識偏重から思考・判断・表現へ、アクティブラーナー育成の方針が見え始めた時期でもありました。

世界をジブンゴト化する

今年は主体的な学びの場を倉敷から海外にも求めて、カンボジア研修を実践しました。アンコール高校での英語ディスカッションでは、流暢に英語を操る現地高校生に圧倒され、タイ国境の高田晴行スクールでは、内戦の爪痕残る農村で、裸足の子どもたちとも遊びました。「発展途上」で一括りにできないカンボジアの多様性に触れ、視野が一気に広がったと思います。

「マチ・プロ」と図書室

本校図書館は南棟と北棟を繋ぐウオークスルーになっています。そこで、授業間に通り抜ける生徒たちも足を止めたくなる、魅力的でタイムリーな特集展示がなされています。

【グローバルに生きる（カンボジア特集）】

【プレゼンテーション&ポスター作製】

【ディベート大作戦】 etc

「マチ・プロ」の強力な後方支援隊であるだけでなく、「資料の探し案内」や「図書館 NewS Letter」等の広報、小論文・課題研究等の資料提供、果ては「アイデアが浮かばない」時の有り難いお助け隊にもなっています。[特集展示「P&P作製」]



(岡山県立倉敷南高等学校長 山下陽子)

**奈義小学校・中学校
「読書大好き奈義っ子になあれ！」**

「本、きれいやったけど、面白うなったわあ」
「先生来てから図書室変わったね」と小学生。
おりがみの本の近くで、男子におりがみを教えている中学生…。

奈義町には、小学校と中学校が各一校ある。今年度から学校司書の配置が決まり、私は小学校週5時間×3日、中学校6時間×2日勤務している。明るさ新鮮さ。利用のしやすさ。あったかさ。知識欲への刺激。調べ学習への頼り甲斐…。私なりにこのような図書室の理想を浮かべて着任した。

まずは廃棄する本の手続き、壊れた本の修理、そして机や書架のレイアウトを考え、学校の図書担当・町立図書館の司書と相談をした。図書館のバックアップは大きく、相談をしたらすぐに一緒に考え動いてくれるので、今では心のよりどころになっている。

レイアウトが決まると、ボランティアさんたちと模様替えをした。奈義町ではボランティアが組織化されており適材適所で助けてくださる。特に中学校では、高い書架を動かし机の向きも変えたら、日光が全体に入り明るく広く感じるようになった。想像通りになって良かったが、ボランティアさんと喜びを分かちあい、作業を通して親しい関係になれたことが一番嬉しい。

また、「図書だより」の発行では、図書室のこと新着図書のこと、裏面にはクイズやトリックアートも載せている。楽しみにしてくれる児童・生徒たちもいて、すぐ解いて図書室へ答え合わせにやってくる姿が見られる。これも図書室と子どもたちをつなぐ一つになっている。

新着図書が届いたらすぐに登録して出すのは当たり前のことではある。けれど、「ぐっとスピーディになった」と図書担当が喜ばれるのは、多忙な先生の助けになっているのかもしれない。

小学校では、低学年は図書の時間が週一度あ

り、本の貸し出しの後、「読み聞かせ」をしている。題材は、季節の移り変わりを感じたり、シリーズものを用いたりして、すてきな本との出会いとなるよう工夫している。 [図書の時間]



児童・生徒の委員会活動でも、「多くの人に来てくれて嬉しい」という声が聞かれる。そう感じる委員がいることも嬉しく思う。

先生方から授業に使う本を頼まれたら、なるべくその日の内に手配している。県立図書館の支援も受けているので、先生方に喜ばれている。

図書システムを小・中学校同時に導入するため、7月から準備に入ることになった。合わせて2万冊弱の本にバーコードを貼りシステムに登録し、ラベルを変える。気が遠くなる作業だと思ったけれど、ここに強い味方が現れる。ボランティアさんたちだ。活動が毎日途切れないように、私の勤務に合わせ、コーディネーターの方が調整してくれる。手際よくバーコードが貼られ、できたものから私と町立図書館の司書、さらに担当の先生・校務員さんも加わり本の登録を行う。パソコンに苦戦することもあったけれど、ボランティアのみなさんが「やってしまおうよ」「やりきろうよ」と自分のことのように声をかけてくださった。

こうして図書システムと蔵書の整理が無事終わり、今は、掲示やコーナー作りなどに取りかかっている。みな



[休み時間]

さんのお蔭でスタート地点に立つことができた。

今後、ボランティアさんをはじめ町立図書館やいろいろな人たちと連携を深めながら、奈義の子どもたちがそれぞれの花を咲かせてくれるよう、図書の充実や管理、工夫、紹介など精一杯応援していきたいと思っている。

(奈義小学校・中学校 学校司書 下山由佳里)

岡山南高等学校活動紹介

岡山南高等学校は、今年度で創立 113 周年を迎えた商業学科と家庭学科からなる伝統校です。4 月の在籍生徒数は 1071 名。「礼儀正しい実力派」を目指し、個性を磨く 5 つの専門学科で、生徒は国数英などの共通教科の学習のほか、専門教科の学習、資格取得、部活動、各種行事に日々いそしんでいます。

図書委員会活動

各クラス 2 名計 54 名の図書委員が通年で活動をしています。1 年生は「読書推進班」としてカウンター当番を行います。2・3 年生は「広報班」「館内整備班」「文化祭班」に分かれて、図書館だよりの製作、季節ごとのテーマ展示コーナーの作成、文化祭への参加など班ごとに活動しています。また数年前より、通常の活動にプラスして有志図書委員による「企画班」も結成され、図書委員の活動は校外にも広がっています。図書委員会交流会への参加、書店の店頭で図書委員が直接本を選ぶブックハンティング、校内ビブリオバトル大会の開催、しおりコンテストの開催、絵本で読書会、新聞の見出しを切り抜いて川柳を作る会など、様々なイベントを生徒主体で企画・参加をしています。

岡山市立中央図書館との連携

本校の最寄りの公共図書館である岡山市立中央図書館に「岡山南高生が選んだ本」コーナーを常設させてもらっています。2 か月に 1 度、企画班が展示の入れ替えをしています。

全校生徒にアンケートを採ったり、図書委員が全員でおすすめの本を紹介してPOPを作ったり、その回ごとにどんなテーマにしてどのような飾りを作るのか、企画班のメンバーが話し合いをしながら取り組みます。市立図書館での作業中に、利用者の方から「頑張ってるね」「いつも見えています」と声をかけていただくのが何よりうれしいことだと、毎回生徒の感想にありが

ます。自分たちも公共図書館をしっかりと活用できる利用者になることと、岡山南高生として地域に貢献できることを目指しています。



〔岡山市立中央図書館に展示コーナー作成〕

学校活動を支える図書館

本校は食物や服飾など家庭学科系の資料を多く揃えているため、授業、課題研究、個々の趣味利用でも、この分野では図書館が頼りにされています。司書の配置された学校で、司書が長期的に学校のニーズを考えて資料を収集してきた積み重ねが、蔵書にも特色となって反映されていると感じます。生徒には「自分たちの声が自分たちの図書館を作る」と話しています。今、学校に足りない分野の資料相談も大丈夫です。立地の近い市立図書館や資料搬送便事業のある県立図書館が資料提供の心強い味方となっています。

今後も自分で課題を見つけて行動する生徒の声をしっかり拾いあげ、多彩な本校の学校活動を支えていくことのできる



〔図書館で新聞を利用した授業の様子〕
図書館でありたいと思っています。

(岡山南高等学校 司書 井上真紀子)

**図書館等ですぐに活用したい
「親育ち応援学習プログラム」誕生！**

「親育ち応援学習プログラム」(通称「親プロ」)とは

岡山県教育委員会では平成 23 年 3 月に、子育てについて共に気づき、楽しく学び合うことができる参加型の「親育ち応援学習プログラム」を発行しました。その後追加プログラムを作成し、平成 27 年度末で合計 30 プログラムを開発しています。子育て広場、保育園、幼稚園、小学校、中学校等で保護者が集まる機会に家庭教育支援の一つとして「親プロ」が活用されています。

その中で今年度開発したプログラムで、図書館や学校園等でぜひ活用していただきたいプログラムを紹介します。

○対象：幼児期（4～6 歳）の子どもをもつ保護者

○プログラム名：

**「本を通して親子でコミュニケーション
～読み聞かせ、どうしてる？～」**

○ねらい

・親子で楽しい時間を共有し、親子の絆を深める手段の一つとして「読み聞かせ」があることを理解する。

・図書館を利用してみようという気持ちをもつ。

○時間：45～60 分



開発にあたって

本プログラム開発にあたっては、図書館で本を借りようとする親子の様子で気になること、読書や読み聞かせに関して気になること等を出し合い、「本を仲立ちにして親子で楽しい時間を共有し、親子の絆を深めてほしい」「身近な図書館の情報を伝え、図書館を利用するきっかけを作りたい」という思いでプログラムを開発しました。

プログラムの流れ

ワーク 1 エピソードをもとにグループで話し

合い、子どもへの読み聞かせで困った経験があることを共有する。

ワーク 2 子どもへの読み聞かせで困ったことや良かったことを話し合い、幼児期では親子で楽しい時間を共有する大切さを理解する。

ワーク 3 読み聞かせの疑似体験をし、子どもに対して「読み聞かせをやってみよう」という気持ちをもてる。

ふりかえり・まとめ 絵本の読み聞かせは義務的にするものではなく、親子で絵本を通じて一緒に遊んだりリラックスしたりする過ごし方の一つとして行ってほしいこと、本と一緒に読むだけでなく実体験との呼応が大切であることを伝える。図書館利用を呼びかける。

プログラムを体験した方の反応や感想

・子どもたちに負けず、私も本を楽しもうと思いました。イライラして子どもを叱ってしまう前に絵本を読む心の余裕を作れたら♡

・「読み聞かせをしなきゃ」という義務感ではなく、子どもとのスキンシップの一つとして、親も一緒に楽しめばいいんだと思いました。



邑久幼稚園（瀬戸内市）での実施の様子

図書館でもぜひ「親プロ」の活用を！

図書館でも親子の絆を深めたり子育ての悩みを解決したりできると思います。何より司書という力強い味方がおられます。プログラムの中のワークを一つだけ実施したり資料をコピーして使用したりすることもできます。本プログラムの詳細や他のプログラム、また活用例については岡山教育事務所のHPをご覧ください。

(岡山教育事務所 三宅千恵)

岡山市立図書館 「重度心身障害がある子どもの 家庭・施設への図書館サービス」

はじめに

近年は医療技術・機器の急速な進歩により、在宅で医療ケアを行いながら生活している子どもの数は年々増加傾向にある。しかし、重度の障害や難病がある子どもたちは図書館の利用に関してはまだまだ困難であると言わざるを得ない。私自身が重度の心身障害がある子どもの親であるため、医療・福祉関係者、難病・障害の支援団体などとのつながりや自身の経験や知識を活かし、図書館への来館が困難な重度の心身障害・難病の子どもへ重点を置いた図書館サービスを平成 24 年度の秋から始めた。毎年「地域活動支援センター旭川荘」に依頼して、在宅で介護が必要な子どもがいる保護者へ家庭配本のニーズ調査を行い、希望があった家庭に毎月移動図書館車で巡回している。

情報提供

サービス内容は従来の家庭配本サービスに加え、発達支援・情報支援の観点を取り入れた資料提供・情報提供を行っている。利用者から要望のあった資料のほかに、その利用者の病気・障害に関する図書館資料・論文・その他の資料を提供する。現在の利用者は国内でも稀な難病であったり、重篤な合併症をいくつも抱えていたりするケースも多い。情報が少なく、難解な障害・病気の情報、服用している薬の情報など、さまざまな医療情報の理解に役立つように、出版されている本、医学雑誌、医学論文の情報を提供するほか、関連の病院や大学、患者会、障害や難病の支援団体から情報提供を受けたもの、ホームページや SNS など入手した情報を精査して提供している。また、国や自治体の医療・福祉サービスに関して利用できる制度についての情報提供も行っている。

発達支援

利用者の許可を得た上で、本人に関する情報（読書履歴、興味を持ったこと、できるようになったこと、好きになったこと、体調の変化、病気・障害の状況など）を本人・保護者とのコミュニケーションを通して毎回記録し、支援計画の参考にしている。提供する資料は本だけでなく、AV、布絵本、おもちゃなどさまざまな感覚で楽しめる資料も効果的に活用する。「日常生活の基礎的なことがわかる」「文字や数に興味を持つ」「時計が読める」「お話を集中して聞ける」など発達の課題を図書館資料を活用して支援する。また、絵本、大型絵本、紙芝居、エプロンシアターなど本人の発達や興味にあわせた資料の読み聞かせも行っている。その際に「うた」「楽器の演奏」「ふれあいあそび」などを導入に用いて、読み聞かせの前に集中力を高める工夫をしている。実際、移動や外出に制限がある子どもたちは毎月家庭配本をととても楽しみに待っていている。

障害児施設への巡回

平成 26 年度から 18 歳未満の肢体不自由の子どもが入所・入院して生活している「旭川療育園」への巡回を開始した。施設の子どもたちへ図書館資料の貸出返却・読み聞かせ等を行っているが、今年の 1 月からは地域の公民館が仲介となり、この地域の文庫の方々と一緒に、「わらべうた」や「読み聞かせ」を行っている。障害児施設は児童擁護施設ほどその存在を知られていない。けれど子どもたちは寂しい思いをしながらもそこで懸命に生きている。地域の人が障害児施設で暮らす人々の問題を自分たちの地域課題として考え、関わっていくことは、コミュニティワークにつながっていくものではないだろうか。その一つのきっかけになれたことはとてもうれしかった。

(岡山市立中央図書館 三船充是)

平成 27 年度岡山県図書館協会 研修参加助成事業報告 (1)

研修名：第 101 回全国図書館大会 東京大会

期 日：10 月 15 日 (木) ～10 月 16 日 (金)

期 日：国立オリンピック記念青少年総合センター

■概要

(第1日目)

開会式・第31回日本図書館協会建築賞表彰・基調講演2015日本図書館協会理事森茜氏・第101回全国図書館大会シンポジウム「図書館とまちづくり」～世代をつなぎ、次代を育て、地域をつくる～

森茜氏の基調講演があった。公共図書館の設置状況は、年々増加傾向にはあるが、まだまだ未設置の自治体がある。司書は増加傾向にあるが、雇用形態が、非常勤職員が多く、図書館のあり方の上では問題である。学校図書館は、学校図書館法改正後、「学校司書」の名称使用が増加した。しかし、課題はまだまだある。指定管理者制度の導入による図書館運営の動向などの話があった。「図書館の自由に関する宣言が60年を迎えたが、まだまだ定着したと言えない。ここから、気を引き締めて行かなければならない。」と述べられた。

シンポジウムでは、各地の図書館の実践と経験が映像を交えながら発表された。その中で、福岡県の宇美町立図書館の発表が印象に残った。『町づくりは人づくり』の理念のもと図書館サービスが行われ、利用者のニーズに、館長以下職員、学校司書、教育委員会が応えようとしていると感じた。地域のニーズに合った図書館活動をする為には何をすべきか。利用者の声を聞き、考えることが大切だと感じた。

(第2日目)

第11分科会 図書館の自由「図書館の自由と個人情報保護の現在を考える」

基調講演 ビッグデータとプライバシー保護 宮下紘氏 (中央大学総合政策学部准教授)

はじめに、宮下紘氏の講演があった。個人情報保護法が、この9月に10年ぶりに改正された。新たに、センシティブ・データの収集の原則禁止という条項を定めた。多くの自治体が個人情報保護条例においてすでに同様の規定が整備済みだが、新たに列挙された。と報告があった。これらのことを受けて、図書館におけるプライバシー保護の在り方について話があった。

基調報告 図書館の自由・この一年 西河内靖泰氏 (日本図書館協会図書館の自由委員会委員長、広島女学院大学)

西河内靖泰氏の報告があった。近年、資料や図書館への異議申し立て事例は多くなっている。2015年6月に『絶歌』が刊行され、出版の是非や図書館での扱いをめぐる様々な意見がマスコミやインターネット上で発信された。日本図書館協会にも多くの問い合わせがあった。その際図書館の自由に関する宣言への認識不足や誤解などみられた。『絶歌』について、「図書館の自由に立ち返れば、その資料を購入すべきか、貸し出すべきか、おのずと答えが見えてくると思う。現場で考えて欲しい。どんな本であれそれを否定するということはない。」と述べられた。

■研修成果

「図書館の自由に参加」して、図書館の果たすべき役割を改めて再認識した。利用者の知る権利を保障する。「図書館員がいい本、悪い本など判断しない。決めるのは、利用者である。」と言う言葉が心に残った。身が引き締まる思いがした。マイナンバー制度など始まるが、ビックデータの危うさ等、勉強になった。図書館はセンシティブ・データとなりうるものを持っていて、扱い方を誤れば差別と偏見の場になりかねない危険性があることを自覚することが出来た。西河内氏が「現場で考えてください」とおっしゃったことを心に留め、資料と利用者に向き合い日々の業務に取り組んでいきたいと思った。

(金光図書館 北林晴美)

平成 27 年度岡山県図書館協会 研修参加助成事業報告 (2)

研修日：平成 27 年度全国公共図書館研究集会

期 日：11 月 25 日 (水) ～11 月 26 日 (木)

会 場：にぎたつ会館 (愛媛県松山市)

■概要

**基調講演：「未来の図書館、はじめませんか？
～これからの図書館計画に向けて～」 岡本真氏 (アカデミック・リソース・ガイド株式会社)**

これまでに関わった図書館プロジェクトの紹介と未来の図書館をはじめめるために注目すべき



「図書館の周辺にある [講演開始前の様子] 変化のチャンス (可能性)」と「まちから生まれる図書館」について講演された。前提として情報・知識へのアクセスという根本機能があり、その上に賑わいやまちづくりといった発展機能があることを挙げられた。様々なサービスを展開する前に資料収集などがあり、こうした根本機能により利用者の知る権利の保障、遺す権利の保障が可能であり、図書館が特権的な立場である理由ともされた。また、発展機能を展開する際には、地域性を考慮、市民ニーズへの対応、市民ニーズの先取りを挙げ、まちから生まれる図書館として必要な図書館員の要件や、図書館をはじめめるプロセスやノウハウなどと、最重要点となる市民参画について説明された。

事例発表：「みんなで考えよう！ワクワクが生まれる新しい図書館」 北岡康平氏 (伊予市教育委員会社会教育課)

開館予定の図書館機能も有した新しい複合型文化施設について、基本理念を実現するために建設市民ワークショップを開催し、その中で多

かったカフェ運営の要望や図書館運営の要望や提案について、実現のためには市民参画の場をつくり、市民協働や地域の活動体との協力が必要であり、そのためには共に汗をかき、信頼関係を築くことが重要であるとされた。その上でまちなか図書室や読み語り隊などの地域内での取組みについて、地域で人財の発掘や育成を行うことは、市民の出番づくりをすることの重要性を説明された。

事例発表：「地方創生と公共図書館にできること」 小林隆志氏 (鳥取県立図書館)

鳥取県立図書館が図書館の図書館として、様々な振興策を行い市町村図書館の設立・充実を支援し、市町村図書館が県立図書館資料を利用しやすくする体制の整備を行い、特に県域における物流システムの速さと送付先の広さが日本一であり、大活字本などの市町村図書館が購入しにくいものについても複本を持つなどの図書館の図書館としての活動について発表された。こうした活動をとおして、図書館の機能を支えるのはネットワークの力であるとされた。また、図書館は何のために・誰のために存在し、職員は何をしなければならないのかという問いを考えていかなければならないとまとめられた。

事例発表：「児童サービス担当から始める地域資源再発見」 島津芳枝氏 (宇佐市民図書館)

宇佐ブランドについて図書館での取組みや、USA 表プロジェクトと図書館での取組みをとおして、地域のもつ多くの資源を再発見し、活用するためには、ただ資料を集め展示するのではなく、地元企業の協力で実物も合わせて展示し、利用者の興味・関心を集める大切さを挙げられた。また、慣習や出身人物など郷土スペースのコーナーについても、どういったものに関心があるのか、それぞれの資料にどういう関連性があるのかを考えて、見せる展示をすることで利用率が高くなったと発表された。

(瀬戸内市立図書館 福村圭祐)

第90回教養講座報告

「コミュニティをつくるビブリオバトル」

期日：平成27年12月8日（火）

講演：「コミュニティをつくるビブリオバトル」

講師：岡野 裕行氏（皇學館大学准教授・
ビブリオバトル普及委員会代表）

ビブリオバトルとは

ビブリオバトルのルールや歴史、機能や図書館で定着させるには、といったいろいろな視点からビブリオバトルについて学びました。

ビブリオバトルは、京都大学からはじまり、今では全国の学校や大学、図書館、地域まで広がりをみせています。なかには妖怪好きなひとが集まる「妖怪ビブリオバトル」や、参加者は着物を着るという条件で行う「着物でビブリオバトル」など、参加条件を絞って行うビブリオバトルなどもあるそうです。やろうと思えばどこでもできる、どんな参加条件でもできるのがビブリオバトルの魅力の1つだと教わりました。

また、ビブリオバトルとは「オススメの本を紹介するコミュニケーションバトル」で、キャッチコピーも「人を通して本を知る、本を通して人を知る」との言葉通り、単なる本の紹介ではなく、人と人とを結ぶツールとしての役割も果たしているそうです。また、「どの本を一番読みたくなったか？」で決定したり、決定した本を「チャンプ本」と呼ぶように、プレゼンのよし悪しではなく本が主役である、とおっしゃった時に、ビブリオバトルはプレゼン力で決まると思っていた私は目からうろこが落ちる思いでした。

ビブリオバトルと図書館

そんなビブリオバトルも図書館ではまだまだ実施していないところの方が多いと思います。図書館で実施する意義としてはオープン性、パブリック性、ソーシャル性にあると岡野氏はお

っしゃいました。誰でも参加しやすい公共の場ということで、図書館はビブリオバトルがやりやすい環境にあるのだと気づきました。

読書体験の共有ができるビブリオバトルが、図書館のひとつの活動としてどんどん広がっていけば、と強く思いました。

（新見市立哲西図書館 小原妙子）

事務局からのお知らせ

■企画委員会

平成27年12月18日（金）に第2回企画委員会を開催しました。主に今年度3月発行の会報内容や、来年度の研修企画について相談をしました。

今回をもちまして、委員の皆様は2年の任期が終了となります。9名の皆様大変お世話になりました。



■異動調査

本年度も例年通り異動調査を行います。所属・住所等の異動があった方は事務局までご連絡ください。また、入会・退会をご希望の方も併せてお知らせください。

平成28年3月1日発行

〒700-0823

岡山市北区丸の内2-6-30

岡山県立図書館 図書館振興課内

岡山県図書館協会 会長 村木 生久

TEL：086-224-1286